

技術教育研究会の創立発起人原正敏先生逝く

佐々木 享

2010年8月30日夜、ご息の正志さんからの電話で、技術教育研究会の創立を発起し、長く代表委員を務めた原正敏先生が逝去されたとの報に接した。享年87歳。

原先生の教職歴は東京大学、北海道大学、静岡大学そして千葉大学と多彩で、その活動は甚だ多くの面にわたっていた。しかし、わたくしたちとしては、技術教育の諸分野について志ある在野の人を結集してその研究と運動をすすめる技術教育研究会という団体を立ち上げ、初代の事務局長として運動を軌道に乗せたことを第一の功績として挙げたい。

技術教育研究、職業教育・職業訓練研究は、教育学の世界ではいまでもマイナーな分野であり、率直に悩みを語り、真摯に問題を話し合い、研究をすすめる場は極めて少ない。そうした必要と要求に応えるために技教研を発足させ、発展させてきた意義が計り知れないほど大きいことは、今日に続く技術教育研究会の歴史に示されている。

先生の最初の編著書は、『技術科の災害と安全管理』（1964年）である。1960年代初頭に技術科で生徒の傷害事故が多発したとき、事態を重くみた先生は、データを詳細に分析してその原因が手押し鉋盤や丸鋸盤の使用にあることを突き止め、これらを生徒に使用させないよう訴え、ついに実現させた。また、実習をともなう技術科の授業は通常の学級を2分する「半学級」で実施すべきだと最初に提唱したのは原先生だった。

原先生の研究と運動の特徴の一つは、中学校の技術科教育をはじめ、高等学校の工業教育はもちろんのこと、最初の論文が「職業訓

練法と学校教育」（『教育』1960年2月）であったように、学校教育以外の分野にわたっていたことである。実際先生には、北海道職業訓練審議会委員、東京都職業能力開発審議会委員（のち会長）の経歴もあった。

先生の多数の著作に共通する特徴の一つは、多数の歴史研究はもちろん、現代的な問題を扱う場合にも、論点を当面の問題に限定せず、資料を綿密に調査して、それを原理的、歴史的にとらえる努力をしたことであろう。一例をあげると、先生は千葉大学の定年間近の頃から、1930年代に始まった「満洲国」向けの技術員・技能者養成の実証的研究に手を染め、65歳で退官後も続けられた。その論考は14編に及ぶ。この研究に際して先生は中国に行つて実地に調査したいという欲求から中国語の学習を始められた。60歳過ぎまで衰えなかった旺盛な探求心にはひたすら感服した。今年の1月23日に依田有弘さんと一緒にお見舞いしたおり、先生の手元にはぼろぼろになるまで読まれた斉紅深編、竹中憲一訳『満洲』オラルヒストリー—〈奴隷化教育〉に抗して—』（2004年、皓星社）の大冊が置かれていた。最後まで歴史的事実の本質を追究する気迫には圧倒された。

先生は根っから温厚な学究の人だったが、地域の人たちから求められれば、市長選挙に立候補することも辞さない情熱を秘めた人でもあった。

ご冥福を祈るとともに、日本の技術教育・職業教育を民主的に発展させるという先生の遺志を継ぐ決意を先生に捧げたい。

（第2代技教研事務局長、元代表委員）